

定例研究会要旨

日時：平成 28 (2016) 年 10 月 5 日 18:00~20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

「社会は敬語をどう獲得するか？ -マクロ社会言語学的考察-

発表者：柳村 裕 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院特別研究員 / 社会言語学,
音声学)

本研究では、マクロ社会言語学的接近法によって、日本語の敬語の習得・変化過程の記述と理論的考察を行った。国立国語研究所の大規模経年発話資料をもたらしした「岡崎敬語調査」(国立国語研究所 1957、1983、2010) の資料を再分析し、話者の個人内での敬語使用における「加齢変化」のパターンを記述した。また、話者の「職業」という新たな分析指標を加えることでこれまでの研究を発展させ、敬語使用と話者の社会的属性との関係を分析した。その結果、敬語の習得・変化パターンに、話者の職業によって異なる二つのタイプがあることを示した。そして以上の観察結果を基に、日本語の敬語の習得・使用・変化が、話者の社会的属性とどのように関わるかを捉えるための仮説を提案した。

岡崎敬語調査資料のうち本研究で分析対象とするのは、11 種類の設定場面における短文発話回答データと、発話者の生年、性別、学歴、職業などの社会属性項目である。3 回の調査(第一次：1953 年、第二次：1972 年、第三次：2008 年)のそれぞれに約 400 名、合計約 1,200 名の話者のデータが含まれる。まず、発話回答に現れる各種敬語形式の使用数を集計した。集計対象は「デス」「マス」「ゴザイマス」「イタダク」「イラッシャル」等の各種敬語形式である。次に、発話中の敬語形式をもとに、各発話文について「丁寧さの段階付け」(国立国語研究所 1957、1983)を行った。これは、主に発話末の表現に基づき、各発話の丁寧さを 3 段階に分類したものであり、最も丁寧なものから順にゴザイマス体、デスマス体、ダ体に概ね相当する。各段階に点数を与え(ゴザイマス体が 3 点、デスマス体が 2 点、ダ体が 1 点)、これを敬語使用特徴の指標として、話者の個人内での敬語使用の変化およびその話者属性差を分析した。

敬語使用の変化の分析は、「見かけ時間 apparent time」および「実時間 real time」で分析により行った。丁寧さの段階点が話者の(調査時点での)年齢によってどう異なるかを見ることで、敬語使用の「見かけ時間上の変化」を観察・記述した。また、特定の年代生まれの話者について第一次～三次および追加調査の結果を比較することで、丁寧さの段階点の「実時間上の変化」を直接的に観察した。そして、以上 2 種の分析を話者の職業ごとに行うことで、話者の個人内での敬語使用の変化が職業によってどう異なるかを分析した。

結果の概要は以下の通り。まず、職業等の話者属性を考慮せずにサンプル全体で見ると、敬語の「成人後採用」(井上他 2016、柳村 2014)が観察された。見かけ時間と実時間の両

方において、話者の年齢が高くなるほど丁寧さの段階点が高くなることが観察された。加齢に伴い敬語の使用量が増え、また、より丁寧な形式を使うという、話者の生涯における言語使用の特徴の変化と解釈できる。

一方で敬語使用の変化パターンの職業差も観察された。すなわち上述の丁寧さの成人後採用が観察されたのは一部の職業の話者のみであり、別の職業の話者には成人後採用が観察されなかった。具体的には、職務の中での敬語使用の違いによって職業を「事務類」「接客類」「労務類」の三つに分類すると、このうち丁寧さの成人後採用が観察されたのは接客類のみであった（柳村 2017）。事務類と労務類は、敬語使用の加齢変化が少なく、早い（若い）時期に身につけた敬語がほぼ生涯を通して使用されると解釈できた。

以上の観察結果より、敬語の習得・使用・変化のパターンと話者属性の関係を捉えるための仮説を提案した。すなわち、敬語の習得には二つのパターンがあり、そのどちらに当てはまるかは話者の属性によって異なるという仮説である。二つのパターンとは、一つは成人後採用であり、もう一つは敬語がより早い時期に習得され、個人内での言語形成期以降の変化が見られないパターンである。今後の研究では、岡崎敬語調査資料の再分析および新たに収集する調査資料の分析を行い、この仮説の構築・検証を計画している。すなわち、どのような話者属性（職業以外も含む）においてどちらの敬語習得・変化パターンが観察されるか、また、これまでに見られていない新たな習得・変化パターンが見られるかを検討し、敬語使用と話者属性の関係を総合的に分析する。

参考文献

- 井上史雄・阿部貴人・鎌水兼貴・柳村裕・丁美貞（2016）『敬語表現の成人後採用—岡崎における半世紀の変化—』国立国語研究所「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」報告書
- 国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』東京：秀英出版。
- 国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較—』東京：三省堂。
- 国立国語研究所（2010）『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』科学研究費補助金研究成果報告書，第 1～4 分冊。
- 柳村裕（2014）「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因—岡崎敬語調査から—」『国立国語研究所論集』8: 177-196.
- 柳村裕（2017）「話者の職業による敬語使用の差異と変化—岡崎敬語調査資料の分析—」『国立国語研究所論集』採択決定，第 12 号掲載予定，掲載頁未定。